

蘇芳集

揚羽 青山 丈

顔向けてゐて老鶯に啼かれけり
咲き過ぎてきた十葉の憎からず
真上より緋目高を見る日でありぬ
目高見てゐて出掛けないことになる
母の日のサラダ綺麗にいただきぬ
繭の花きのふのやうな雨のあり
二度三度消えて揚羽が前を飛ぶ

船型ビル 小島 みつ如

駅前の船型ビルや花の冷
子に守られシルバークーの馬酔木径
庭低く何か確かむ初黄蝶
バーグマン懐かしカサブランカの芽
通りすがり牡丹桜の頬に映え
花万朶くろがね色の支ふ幹
吾にまだ想ふ自由よチューリップ
春 日 清水 裕 子
高々と春日に干され羽根布団
春昼の踏みて木の影ビルの影
たんぽぽの絮がとぶ湧くやうにとぶ
よく燃える町外れなる春焚火
万愚節なまけ心のまま老いぬ
夫在らば木の芽和えなど作りたし
マスクして考へごとの纏まらぬ

花便り 下平直子

昔日の海の宿より花便り
花の道抜けて郵便局に用
父と子に桜吹雪の滑り台
大いなる夕日の中を桜ちる
池越に誰か手を振る花の窓
神杉の間をきらきら春田水
鶯を聴く青空へ身を反らし

桜 富田正吉

父さんと汝に呼ばれる桜かな
みちのくの桜よ白きご飯粒
花吹雪からだが浮いてくるごとし
花吹雪ひとひらぶつの時間かな
花浴びて賢くなつてきたやうや
晴れ切つて桜つめたくなりにけり
衾襦が枝垂桜をくぐるなり

森のこと 野路斉子

まじまじと見て窓外の蝶の顔
窓塞ぐ泰山木のただ一花
コロナ禍の町に老鶯声明るく
一瞬や森吹く風に見えて枇杷
森深く熟れたる枇杷は誰のもの
歩道橋あれば渡りて梅雨鴉
森のこと森来し人に聞き晩夏

累累と 前田陶代子

さくら散りつぐ水中にゐるごとし
水鉢も大燈籠も春暗し
昼を深めて累累と落つばき
紅椿あまた見て来し火照りかな
赤松の向う赤松春ふかし
水音の遠し蛙の目借どき
ふかぶかと夜のありける八重桜

糸ざくら

峰岸 よし子

萌ゆる芽の音たててをる櫟山
まんさくや強風に声もつれをり
澱のごと残るひとこと沈丁花
なかぞらの風のさみどり仏生会
春の月杓子濡らして使ひけり
糸ざくら空の色して月出づる
飛花落花樹々の高さの戻りけり

花の雨

宮尾 直美

廃校のピアノが鳴るよ春の昼
花の雨マーマレードを煮て暮るる
桜から桜を歩く小さき旅
父のぶん生きて句をなす遅桜
花過ぎの大樹に風の哭くばかり
起きぬけのかんばせ吹かる花水木
菩提寺のつつじ火の色僧病めり

風薫る

八木下 末黒

乱杭の頭を越しにけり春の潮
乱杭の丈頭はるる潮干狩
巢箱見つけて高鳴きの四十雀
大風の裏道に落ち桐の花
河骨の斜めと言へば斜めかな
河骨のひしめく上の蜘蛛の糸
風薫る子の歓声のすべり台

野火を打つ

吉田 幸敏

四方山の話これだと野火を打つ
駒返る草や噂に耳も目も
蘆牙に人影長し梅若忌
長居して桜の闇のもぞもぞす
春ゆくと風船ガムをまた鳴らす
抜け裏の藤波に音ありにけり
ひたぶるに雲を食みをり未草